



嬉泉の新聞 第89号 2024年（令和6年）3月発行
発行＝社会福祉法人嬉泉
東京都世田谷区船橋 1-30-9（〒156-0055）TEL 03-3426-2323
<http://www.kisenfukushi.com> E-mail: kisen@kisenfukushi.com

「課題を媒介とした交流」

日本抱っこ法協会名誉会長・袖ヶ浦非常勤講師
阿部 秀雄

かつては、「石井哲夫先生、ああ受容ね」と軽く言われ、しかもその受容とは子どもの好きなようにふるまわせることだと誤解されることがあったような気がします。しかし、交流を目指してこそその受容であり、その交流も、まずはこちらから相手に寄り添っていく安定中心の交流から始めるけれども、いつまでもそこにとどまっていたのでは自閉症の人の内面は変わらない、砂上の楼閣のようなもので状況の変化によっていつ崩れてしまうかわからない、次のステップとして課題を媒介として人との関わりに誘う積極的な交流へと進む、それこそが受容的交流療法の本命なのだ、という肝心なところはなかなか理解してもらえなかったようです。課題を媒介とした交流の実践は難しいけれども、難しいからと言って手をこまねいていたら、受容的交流療法の宝の持ち腐れになってしまいます。

先生の著書を拝読していると、「わたしもなるべく分かりやすく伝えようとはするが、あなたもそれなりの読み解く苦労をなささいよ」という声が聞こえてくるような気がします。先生の関心は何よりも、仮説を立ててはつぶしての実践を積み上げてその結果を理論化することにあつたのです。その成果を分かりやすく読み砕いて伝わりやすくするのは、先生の志を継ごうとする人たちの務めでしょう。私も微力ながらそのお手伝いをしたいと思います。

いま私は袖ヶ浦で、就労2年目の職員を相手に年5回の心のケア研修をさせていただいています。そのなかで私なりの理解をもとに、若い職員が課題を媒介とした交流の真髄を学び、行く行くは石

井先生の実践レベルに少しでも近づくことを目指して、まずは初歩的な取り組みを身に付けて頂く試みをしています。それには、頭（理論）と心（内省）と体（実技）とがひとつになった学びが必要ではないかと感じているところです。

（1）理論—分かる

受容的交流療法を分かりやすく読み砕いた研修テキストを提供して、事前に読んでおいてもらうことにします。「事前に」というわけは、限られた研修の時間はなるべく座学ではなく、心や体の学びに当てたいと思うからです。また、可能な限り映像を使って、理論の理解を助けたいと心がけています。

（2）内省—感じる

感情抑制社会に生まれ育った私たちは、気持ちを感ずることがひどく苦手になっています。しかし、課題に誘うことによって生じる葛藤をなだめて納得へと導くためには、情緒が決定的な役割を果たしますから、かつて石井先生がサイコドラマによってなさったように、支援者自身が情緒の働きについて知り、みずから内省することに慣れ親しむことが大切だと思っています。

（3）実技—身に付ける

交流場面を具現化した実技を考案して体験してもらいます。ところがいざ体験してみると、たとえば車の運転教習のような初めての体験という気がせず、人間性の一部として自分がもともと秘めていたものに出会うかのような懐かしさを感じて、腑に落ちることが多いようです。受容的交流療法が母性行為を原型としているからなのでしょう。

【阿部先生の巻頭言を受けて】

療育援助局長 沼倉 実

巻頭言を執筆していただきました阿部秀雄先生は、嬉泉福交流センター袖ヶ浦において40年以上にわたり「抱っこ法」のセッションをはじめ講義や心のケア研修等の支援現場にそつた実践的な「関わり」を利用者、職員ともども持ち続けていただいています。故石井哲夫が阿部先生にお声掛けさせていただいたのも、石井が実践的な研究者として、利用者とかかわりの中で得られた臨床体験をもとに理論を構築していくスタイルを貫いていたこと、阿部先生もその点では基本に置く考え方が近しかったからなのではないかと思えます。とはいえ、すでに40年前の阿部先生は当時新人職員であつた私にとってはもう高僧のように達観した境地にいらつしやられる雲の上の存在のようにもありました。利用者の力を信じ切り、主体的に考え動けるように声をかけたり身体で対話したり、毎回汗だくになりながら利用者や職員とかかわりを持たれる姿は、ともすれば進む方向を見失いそうになる若い支援者の頃の私にとってはとても大きな道標

となる存在であつたのだと思ひ返します。その間、私だけでなく、何十何百という利用者と職員、親御様と関わりを持つていただく幸運な機会をいただき、その誰もが、どんなに勇気づけられ力添えをいただき、前を向いて進むことを支えてもらえたことか、とても言葉には尽くせないご業績であると懽々ながら思っているところです。（もちろん嬉泉でのご活動は阿部先生のそのほんの一部なのは云うまでもありません）

今回、阿部先生には、「心のケア研修テキスト」として、法人の全職員に受容的交流の研修として活用できるようにと、これまでの袖ヶ浦で研修をしていただいたものを加筆・再編集していただき、素晴らしい内容の新たな道標を得ることが出来ました。昨年度より、私の担当している仕事のことですが、嬉泉では受容的交流の考え方の伝達継承を職員はじめ関係者の方々と行うための活動を担当する部署として「療育援助局」を置いています。これまでは、故石井哲夫常務理事から直接指導を受けて良くも悪くも丁稚奉公的な「修行」による身につけ方で伝承を受けた受容的交流の相談・療育・保育の技術のある程度持った職員が、若手職員のスーパ―

ビジョンを行ったり、外部の関係者に説明したりすることで「受容的交流とは？」ということに込めてきました。しかしながら、石井と共に過ごす経験を持つ職員も職員の割合からは少数になり、また、そういった職員が5・60歳台になり、さらには働き方改革で仕事の仕方もクリアになり、直接の支援現場での共に働きながら継承するというスタイルを取ることがままならなくなってきたこともあり、テキストのようなものを作成して、より分かりやすく受容的交流を伝えるツールを望む声が出てきていたところです。石井哲夫の著作の研究や職員からの支援情報提供など行ってきましたが、まとめ上げていく作業はなかなか難しく、遅々として進まずの療育援助局でした。

今回の阿部先生のテキストは、石井哲夫の著作の解釈をより具体的に実践例につなげて職員が身近なものとして感じられるように綴られています。支援の実践者であれば、新人でもベテランでも、考え方が整理されて視界がクリアになることは確実であると思います。

内輪の話になってしまいましたが、受容的交流の考え方は、根本は不変のものであると考えますが、その表現

や方法は時代によってブラッシュアップして変わっていくものでもあると考ええます。石井も晩年になつても、新しい体験を得るごとに変化した考え方を発表し続けていました。その姿勢を受け継ぎ、今後も嬉泉の職員が支援実践の中で、受容的交流の考え方を伝えていくだけでなく、また新たな知見を積み重ねてより良い支援の提供を目指していくことが嬉泉らしい態勢であると考えています。阿部先生のテキストは、そのための新たな礎石を据えていただいたように、私には感じられました。阿部先生には、今後も引き続きご指導をいただき、我々職員も、その英知を余すことなく吸収し、現理事長石井啓云うところの「受容的交流道」を極めていけたらと思います。ご関係の方々にも、このテキストの公開など、追つてできましたらと計画しているところです。



「山崎晃資先生を偲ぶ会東京」レポート

わかばの家 施設長 大岩香代子

去る2023年8月5日、「アルカディア市ヶ谷私学会館」にて『山崎晃資先生を偲ぶ会東京』が執り行われました。

2023年4月21日に、先生がご逝去（享年85歳）されてから、「（一社）日本自閉症協会」の市川宏伸氏（同会会長）が代表発起人となり、「北海道大学精神科同窓会」より井上猛氏（東京医科大学精神医学分野主任教授）、「東海大学医学部」より松本英雄氏（東海大学名誉教授）、「（二社）日本児童青年精神医学会」より岡田俊氏（同会代表理事）、「（公財）明治安田こころの健康財団」より大河原清人氏（同会理事長）、「全国情緒障害



教育研究会」より小林英忠氏（同会会長）、「社会福祉法人嬉泉」の石井啓理事長の7団体7名の発起人によって実現の運びとなったものです。嬉泉からは、他に運営のお手伝いをかねて責任者層の職員が参加いたしました。

山崎先生は、児童青年精神医学をご専門とする医師として、特に自閉症研究への造詣が深くいらつしやり、嬉泉としても長い間大変お世話になった先生でした。故石井哲夫常務理事との親交深く、昭和59年から始まった法人主催の「自閉症治療教育セミナー」（後に自閉症療育実践セミナー）では、長年にわたり、共同企画者としてご参画いただき、また法人の嘱託・スーパバイザーとして、晩年まで「東京都発達障害者支援センター」をはじめ、各事業所職員のご指導を頂きました。

『偲ぶ会』当日は、『発起人代表のご挨拶』に始まり、「日本児童青年精神医学会」元理事長の牛島定信氏より『献杯』のご発声、『故人の紹介・思い出のスライド』の上映、その後、『各団体からのご挨拶』となりました。各発起人の方に加えて、「北大同窓会」三國雅彦氏（社会医療法人函館博栄会 渡辺病院 副理事長）、「東海大学」三上克央氏（医学部総合診療学系精神科学教授）、「日本児童青年精



神医学会」齋藤万比古氏（元理事長）、「明治安田こころの健康財団」宮本義久氏（総務部長）、「全国情緒障害教育研究会」植草葉月氏（常務理事事務局長）（※会長欠席の為代読）、長谷川安佐子氏（参与 元事務局長）、「日本自閉症協会」今井忠氏（副会長）、宮崎英憲氏（顧問）、「嬉泉」沼倉実理事と続き、さらに「目白大学関係」矢島卓郎氏（目白大学名誉教授）が『お別れの言葉』を述べられました。

皆さまから、生前の山崎先生との係わりあいや、先生のお人柄が偲ばれる貴重なお話がありましたが、どの方のお話しにも共通して、先生の、研究や臨床に対する真っ直ぐな思いと妥協のない厳しさ、その底にある人情味あふれるお人柄が伺えるものでした。それは、嬉泉での先生のお姿とも

重なり、またご参加の皆様も傾きながら聞き入っていらつしやり、時に涙したり笑いがこぼれたり、和やかな一体感に包まれたひと時でした。そこに在りし日の先生が、ありありといらつしやるようでもありました。

最後に、『お礼の言葉』として、司会により奥様からのお手紙が代読されました。「我が人生に悔いなし」と、家族の皆に残した遺言状の結びの一言を信じ、生きていきたいと思えます」という一節が、深く心に響き、先生の、自閉症研究と臨床に情熱を注がれた生涯、見事に生き切った人生を祝福するかのような余韻に満たされ、閉会となった次第です。



【ヘラルボニーについて】

すこやか園 園長 稲垣 修

・ヘラルボニー？

「稲垣君、ヘラルボニーって知ってる？」と、3年ほど前に、鎌田のびやか園の坂田園長から声をかけられました。「有名なんですか？」と聞いたところ、「バッグとかスカーフとか、今の若い人達に人気らしいよ。」と教えてもらいました。エルメスのような高級ブランドと勝手に思い込んでいましたが、ヘラルボニーをインターネットで調べてみると、障害のある人の感性や発想を『異彩』と捉え、様々な形で社会に送り届けるという趣旨の会社でした。調べる中で、バッグやその他の商品、また、企業とコラボレーションをした取り組みなどは、従来までの『障害者の作品を使用しています』といったものではなく、『二つのデザインとして世の中に発信していきます』という姿勢があり、企業ブランディングに驚きました。しかしながら、ヘラルボニーで採用されている作品は、幾何学模様や水玉模様をモチーフにしたものであり、動物や景色などをモチーフにした作品のアトリエ・アウトスとは難しいのではないかと、調べる程度にしてホームページを閉じました。

・ヘラルボニー！

「稲垣君、ヘラルボニーって知ってる？」と、昨年の11月に、理事長から声をかけられました。「知ってます！」という会話から、株式会社ヘラルボニーとアトリエ・アウトスの関わりが始まりました。株式会社ヘラルボニーの担当者として打ち合わせを重ねながら、実際に袖ヶ浦のアトリエに原画を見に来て、職員とのやりとりによって作者が気持ちよく動かし、作品を作ることになった一人ひとりのエピソードを、とても長い時間、興味を持って聞いてくれたのが印象的でした。株式会社ヘラルボニーは3年前に私が調べた時よりも、驚くほど様々な企業とのコラボレーションを行っており、アウトス係として以前から難しさを感じていた、アトリエ・アウトスの作品を社会に発信するという部分で、とても心強く感じています。今年度に入り、物流倉庫の休憩所のアートパネル、日本航空（JAL）機内食の装飾など、具体的な案件が進んでいます。株式会社ヘラルボニーと共にアトリエ・アウトスの作品が、多くの一般の人たちの目に触れ、作品、アトリエ・アウトスに興味を持ってもらえることを期待したいと思っています。

【アトリエ・アウトス展 世田谷美術館】

世田谷美術館

今回で23回目となる世田谷美術館区民ギャラリーでのアトリエ・アウトス展ですが、今年は市川浩志さんの『勲章鳥アラジン』、浜ノ園武生さんの『皇帝ペンギンの親子』、持田想一さんの『五羽のサギ』、黒林真さんの『会社の人』というアトリエ・アウトスの代表作を出展する、珍しい機会となりました。

きっかけは6月の玉川高島屋でのアトリエ・アウトス展の期間中に、FM東京の『サステナデイズ』という番組内でアトリエ・アウトスの絵を紹介したいという申し出から始まりました。「ラジオ番組で絵の紹介？」と思いましたが、今のラジオ番組は番組ウェブサイトと連動しており、情報を目で見ながらラジオ聴くことが主流だそうです。10月に入り、番組内でインタビュという形で理事長が出演し、4週にわたり4枚のアトリエ・アウトスの代表作の紹介をし、さらに翌月の世田谷美術館でのアトリエ・アウトス展の宣伝もしてもらいました。そのような流れを経て、番組で取り上げてもらった4枚の代表作が揃うアトリエ・アウトス展となりました。会期中は『サステナデイズ』を聴いて実

物を見に来た方もおり「やはり実物は迫力がある」「色の濃淡の凄みを感じる」などの感想をいただきました。「この時期に来るのが楽しみで」と毎年の開催を楽しみにしてこられた方、散歩がてらふらりと寄ってじっくりと見ていかれた方、地域の保育園の子ども達など、様々な方がアトリエ・アウトス展に会場していただき、とてもありがたく思っています。

アトリエ・アウトスの作品が生まれる過程には、法人が『大切にしていたもの』が濃縮されていると思っっています。作品を通して、少しでも多くの人々が『大切にしてきたもの』に触れていけるように、毎年のアウトス展の機会を大事にしていきたいと思っています。



「アフター」コロナにおける取り組み

子どもの生活研究所 編

こどもTOSCA

センター長 坂田由紀子

『子どもの生活研究所』は、社会福祉法人嬉泉の他拠点にはない「保育」と「療育」の両事業を行っている複合型の施設です。

新型コロナウイルス感染症が流行し始める以前は、子どもの生活研究所を会場に法人バザーを年1回秋に開催し、関係者の多くに会場頂き、とても賑わっていました。また恒例行事である夏祭りやお餅つきでは、各園の利用者の皆さんが合同で季節ならではの催しを楽しんでいました。しかし、コロナの流行以降は、法人バザーやその他の行事が中止や縮小となり、日常の保育や支援も休園や登園の自粛等、それまでは想像もできなかった事態を経験することになりました。

それから約3年が経過し、ようやく今年5月から通常の事業運営に戻りつつある現状に少しホッとしています。

改めて、この約3年を振り返ってみると、子どもの生活研究所では様々な変化がありました。大きなこととしては、東京都の委託を受けて

平成15年から運営を行ってきた東京都発達障害者支援センター（通称：TOSCA）が、令和5年1月より大人部門と子ども部門に分かれ、社会福祉法人嬉泉は18歳未満が対象となる子ども部門（通称：こどもTOSCA）を受託し運営することになったことです。こどもTOSCAの事業では、子ども・若者のひきこもりとコロナ禍の社会問題を踏まえて、オンライン相談を開始することになり、わざわざ足を運ばなくても自宅で対面での相談が受けられることから、若年層のご家族からの希望が多くなります。コロナの流行等がきっかけではありましたが、より相談者のニーズに即したサービスが提供できるようにになったのではないかと思います。

このように他事業所においてもコロナの流行によって変更したり、新たに開始したことが色々ありました。例えば、すこやか園（保育所）では、保護者が登降園時に必要な登録を、それまでは玄関前に設置されたタッチパネル式を活用していました。しかし、順番待ちで密集の状態になることがあるため、各自の携帯から操作ができるようにQRコード式に変更しました。又、めばえ学園（児童発達支援センター）では、負担に感じる子どもも

いる中、入室前の体調チェックとして毎回検温を実施することになりました。そして、おらか学園（生活介護事業）では、予定の変更や見通しが持てないことに緊張や不安を感じやすい利用者が多くいる中、これまでの園生活では経験のない園内でのワクチン接種を実施する等がありました。

しかし、このような変化によってもたらされた利点や、新たな発見も多々あったと感じています。すこやか園では、QRコードの導入によってICT化が進み、園からのお知らせ等が配信式となり、保護者の方には仕事の隙間時間に手軽に見て頂くことができるようになりました。又、め



ばえ学園では、子どもによっては苦手だった検温が、日々の積み重ねによって、今では子ども全員がスムーズに検温できるようになりました。そして、おらか学園では、ワクチン接種も含め予定の変更等に対して、利用者の方がそれぞれに状況を受けとめて対応する姿が見られました。

さらに、子どもの生活研究所の行事についても、現在の園単位での開催は、以前の合同行事とは異なるメリットを感じています。職員が、対象となる子どもや利用者一人ひとりの姿を具体的にイメージし、一人ひとりが楽しめる状況を考え、より丁寧に行事をつくっている印象を受けます。又その過程では、法人の支援理念を再認識したり、保育や支援、行事のあり方について柔軟に考える機会になっているように感じています。

このように新型コロナウイルスの流行等によって様々なことが変化しましたが、子どもの生活研究所にとっては新たな発見や学びにつながることが多くありました。今回の経験を糧に、今後の保育や支援においても様々な状況に柔軟に対応しながら、子どもたちや利用者の方たち一人ひとりの安全、安心、安定した生活、主体的な生活を目指して、支援を行っていきたいと思います。

「アフターコロナにおける取り組み」

～ 袖ヶ浦 編 感謝!! ～

袖ヶ浦ひかりの学園

園長 松田 香

袖ヶ浦の中でも入所施設である、のびろ・ひかりの学園は利用者にとっては家庭に代わる場であり、いわば大家族の家のような状況です。食事や入浴、睡眠等、多くの時間を一緒に過ごすことが当たり前の生活です。そんな中、感染性の疾病に一人でも罹った時にはすでに数人の罹患者がいてもおかしくなく、次の日には5名、その翌日には10数名の罹患者が発生する状態に容易くなっています。特に新型コロナウイルス感染症についてはどのような病気なのか分からず、対策はとるものの完全に防ぐことは難しいかとも思いながらもなんとか感染せずにやり過ごせないものかと考えていました。しかし、それは突然にやってきました。気が付けば何人もの罹患者が確認され、それは利用者さんだけでなく職員も一人二人と感染が広がっていきます。その最中は電話が鳴るたびに「また…誰か？」と不安が押し寄せ、違う連絡だとわかるとほっとする、一喜一憂の日々。生活の場を支えている職員が感染してしま



い、一人二人と抜けていくのは恐怖でしかありません。家庭で置き換えれば、お父さんもお母さんも病気になる、子どもだけになってしまった、そんな状態です。そこは誰でもいいから人がいればいいという訳ではなく、お父さん・お母さんの代わりになる人がいないと子どもは不安になります。ただでさえ感染症対策で職員はガウンを着用し、いつもとかなり違った様相、加えて変更につぐ変更ばかりの毎日です。このまま感染が広がったらどうしようという不安が押し寄せる中、この事態を乗り切ることが出来る原動力となったのが連携体制です。袖ヶ浦は児童部と成人部に分かれており、児童部はのびろ学園と子ども発達支援

センターたのしみ、成人部はひかりの学園とグループホーム、相談支援事業、うぐいす園と日常的に連携し支援を行っています。これはこのような緊急事態を機に始めたのではなくここ数年、日常的に連携する体制を作り始めていました。例えばのびろ学園にたのしみの職員が支援に入ってもそれは日常の事であり、いつもの風景です。これが功をなした大きな混乱なく生活することができました。それは職員にとっても同様で、罹患するかもしれない緊張や職員数が少なく混乱している状況で多くの責任を背負いながら支援にあたっている時に、応援に入ってくれる職員がいるという事は大きな安心感へとつながりました。また、感染対策として外部との直接的なやり取りを制限している状況下ではどうしても孤立感や疲弊感が強くなり、それが悪い方向に行くことも容易です。自分達だけで乗り切るのではなく、一緒に支えてくれる人達がいると思えるだけで安心できることも多くあります。当時を思い返すと、もし、このような連携体制を築いていなかったら、到底この事態を乗り切ることが出来なかったのではないかと思います。

ここ数年、新型コロナウイルス感染症への対策としてなるべく集団での活

動を減らしていたことで、学園やグループでの生活が多くなり、共同で何かを行うことが非常に少なくなっていた中、コロナを止めるという緊急事態ではありますが、一つの目標に向かって皆で取り組むことは久しぶりででした。特にコロナについては経験が無く、初めての事ばかりでしたので、内外部問わず相談し対応にあたりました。その過程で関係者からの助言やご家族の方からの多くの励まし等、皆さんの支えの上で今の生活が成り立っていることを実感したと同時に、時に人と繋がることは煩わしさを感じたり負担になる事もありますが、人を支えていくには自分たちが人と支え合い、協同していく事が大切なことであると改めて感じました。皆さんの協力で無事に乗り越えられましたこと、心より感謝申し上げます。

